令和７年度　長崎大学教育学部附属小学校　学校だより

「らしさ」輝く附属小

第１３号　令和７年　７月　４日（金）　校長　森内　秀学

附属小の「ながさき伝統野菜」を広げる取組が新聞で紹介

未来をつくる 直売所 ⑫

リアルな体験から学ぼう

広がる農の探求学習

まちむら交流きこう　森岡亜紀氏

地産地消イレブンの第９条は「リアルな体験から生きる実感を得よう」です。長崎大学教育学部付属小の「ながさき伝統野菜」の学習は今年で5年目を迎えます。当時の3年生がコロナ禍の総合的な学習で野菜作りを検討し、長崎にしかない伝統野菜に着目したことが始まりです。

まずは伝統野菜を知るため、県内に数人しかいない生産者や土づくりの専門家を招いて学習を実施。土づくりや土壌分析も自ら行いました。そして、生産者の指導で「長崎白菜（唐人菜）」「辻田白菜」「長崎高菜」「長崎赤かぶ」「長崎紅大根」の栽培を校庭で始めました。

伝統野菜の調理法や活用法の提案や種取りにも挑戦しました。作り手として得た経験から資料を作り、街頭での宣伝活動も。料理人や弁当屋にも紹介し、商品化にもつなげました。メディアにも取り上げられたことで、「ながさき伝統野菜」への注目が高まりました。

学校給食での使用回数も年々増え、栄養教諭と連携した広報活動によって全校に伝統野菜の認知が拡大。全国学校給食甲子園でも伝統野菜の給食で入賞しました。今、教育現場で盛んな探究学習とは、自ら課題を設定し、その解決に取り組むことで生き方を考えていくもの。伝統野菜の栽培では気候変動や種の交配、連作影響など事前に予期せぬこともありましたが、これらに向き合うことそのものが学びです。生産者と連携して進める探究学習は、子ども達が主体的に参加し、成長が促される活動として期待されています。

長崎大学教育学部付属小学校の校庭で作る伝統野菜の長崎白菜（唐人菜）。
Ⓐは地産地消イレブン第９条のイラスト

【日本農業新聞　R7.6.22】

やさしさプロジェクト紹介

スマイルチーム活動の、「やさしさプロジェクト」の子どもたちが児童集会で取組の紹介を行いました。「全校なかよしチーム」「環境保護チーム」「菜園チーム」「生き物チーム」の４つを通して、「らしさ輝くスマイル附属」を創るそうです。きっと笑顔で優しい子どもが増えますね。

不審者対応合同避難訓練

浦上警察署の方をお招きし、附幼・附中と３校合同で不審者対応の避難訓練を行いました。

職員も別枠で研修を受けました。連携と訓練と心構えは大切ですね。

高尾小校内研を本校で実施

長崎市立高尾小の先生方が校内研として本校６年生の算数の参観に来られました。それぞれの課題と理解度に応じそれぞれの進度で学んでいく「自由進度学習」という授業のスタイルは、近年再度注目を集めているため、協議会（上）はみなさん真剣でした。お役に立てたなら嬉しいです。

北斗の学校「らしさ」

言語や文化は違っても

本校は、留学児童を受け入れています。

今年度も、５年生にニュージーランドから留学児童がやってきました。授業や遊びに加え、制服、清掃、給食、運動会など、日本の学校文化にもふれています。

右の写真は、スマイルチーム活動でヤギのお世話をしている様子です。保護者の方も附属小に通う中で、「たくましくなりました。学校でコミュニケーションを図ろうとしているせいか、物事をはきはき言えるようになっています。」と変化や成長を話してくださいました。新たな場所での生活は大変ですが、これまでの当たり前を見つめ直したり、自身の可能性を見いだしたりできますので、環境の変化は子どもの成長のスピードを加速させます。

一方、学級の子どもたちにも変化がみられています。最初は、困らないようにと常に気掛けてお手伝いをしていました。相手の感情を想像し、自分なりの解釈で感情に寄り添う関わりです。それが次第に、学級の仲間として、できることは任せ、助けが必要なときは手を差し伸べるようになりました。相手の気持ちを自分の感情として感じるのではなく、相手の立場に立って考える関わりです。担任も「人への関心、そして気遣いの心が成長です。何より、視野が広がり様々なところに気付くようになりました。」と子どもの成長を感じていました。

言語や文化は違っても、同じ場所で同じ時間を共有する仲間の存在は大切です。１２月のお別れまで、かけがえのない思い出になるよう見守っていきます。

教頭　橋田　晶拓

教えから学びへ 3

答えは子どもの中に

表面で紹介している「高尾小校内研」について、第6学年の算数科「場合を順序よく整理して」の一部を自由進度学習として公開しました。子どもの、「一人で静かに取り組める環境や気兼ねなく友達や先生に質問できるコーナーが欲しい」という思いを受け、6年2組担任　久松教諭主導のもと、単式3学級を解体し、教室を次のような形態に分けて実施しました。

子どもは自分の目的に沿って教室を選択し、途中で移動することもできます。多様な環境の中で多様な学び方を経験することで、自己の課題に応じたよりよい学びを獲得することができるものと考えます。

子どもは次のように振り返りました。

○「個の部屋」で集中して取り組んだ後、「師の部屋」で自分の考えを発表することができました。
○「協の部屋」で友達と説明をし合ったことで、自分の考えが分かりやすくなって、理解が深まりました。

子ども一人一人の中にある「こう学びたい」という思いを実現していくことで、「自分らしい学び方」への気付きを促していきます。

主幹教諭　松尾　勇哉

背伸び

あいまい、だけど、堂々と

5年生の社会科の学習での一幕です。これからの日本の食生活についての考えを出し合っていました。

「戦争が起こっている地域もある中で、いつも周りに頼れるわけではないと思います。」
「他の国から何も輸入しないとなると、関係が悪くなってしまうかもしれないよ。」
「でも、国産の方がやっぱり安心できるよね。」

子どもたちはこれまでの経験値を基に、少し背伸びをして語ります。きっと御家庭で話題に挙がったことや、ニュースなどで見聞きしたことなどを、自分の考えとして語っているのでしょう。でも、そこには、問い返されると困るようなあいまいさも含んでいることが多いです。それでも子どもたちは、自分なりの考えとして必死に伝え合うことで、浮き彫りになってくるそのあいまいさを、学びの中で解決していきます。

少し背伸びをして語り合いながら、自分たちで学びを展開していく北斗の子の姿は、ほほえましくも、見応えがあります。

教務主任　野口　拓也